０７・半日だけのはなればなれ

本編０６の数時間後。
とある年の春。十二時すぎ。
大陸西部にある、主人公達の住む街。
天気は晴れ。気温は二十二度程度。

場所は、街の中央病院の、建物から出てすぐ近くのところ。

先ほど街で買い物を終えた主人公は、今、病院に向かっている。
そろそろ検診が終わったであろう、メルヤを探しているのだ。

ＳＥ１　外の環境音
【最初から最後まで流す】
【繰り返して流す】
【０―１０秒ほど流して『メルヤ』のセリフ】
【その後、音量がとても小さくなって流れ続ける】

【▲1　でフェードアウトする】

▲　ボイス加工あり
【かなり遠くで聞こえる】
●正面　30センチ
「【看護師と話している。
穏やかで丁寧に、かつ、真剣な様子で。
ガラテアと話す時や、チハと真面目な話をする時のような『看護師モード』『姉モード』に近い声で。
看護師は、騎士団附属病院から応援に来ていた、メルヤや主人公と比較的年の近い女性。
主人公とは特に親しいわけではないが、顔見知りだ。
なので、主人公の人柄・評判についても、ある程度知っている人物である】
はい、では、その件についてはまた明日の二時に……。
【真摯にお礼を言う。
メルヤはこの看護師に『主人公の処分を軽くするために、今、様々な働きかけを行っている。良かったら、協力してもらえないだろうか』と頼んでいたところなので】
ご協力誠にありがとうございます。
このお礼は、必ず……！」

【※ボイスなし※】
〈看護師〉
「いえいえ、そんなにかしこまらないで。
私もあの件については、ちょっと思うところあるしね。
できる事なら、協力したいと思ってたから。
そいじゃあ、また明日改めて色々聞かせて。
さっき言った時間なら、ゆっくり聞けるから。
他に協力してくれそうな子も呼んでおくよ」

▲　ボイス加工あり
【かなり遠くで聞こえる】
●正面　３０センチ
「【看護師と話している。
真摯に、少し興奮気味にお礼を言う。
看護師がこの件について、とても協力的な事に感激している。
彼女の人柄に感謝するのはもちろん、『やはり主人公は、周囲から支持されている女性なのだ』『本人は自分を目立たない・さえない女性だと卑下するが、そんな事は決してないの

だ』とも思っている】
ありがとうございます！
はい、ではまた明日。
お時間ありがとうございました……！」

【※ボイスなし※】
〈看護師〉
「こちらこそ。また明日ね！」

〈主人公〉
「……？」

めーちゃん、誰と話してるんだろう……？

主人公、メルヤの声がするのに気づいて、いそいそと近づいて行く。
すると特徴的な後姿が見え、主人公は歩みを早める。
ちょうどメルヤは、誰かと話していたようだ。
だが、主人公の位置からは、それが誰だったのかまではわからない。

声も、何とか聞き取れる程度だ。
その上、二人の話はちょうど終わったところらしい。
主人公が声をかける間もなく、相手は去って行ってしまった。

SE2　主人公の足音
【最初から最後まで流す】

あー……。行っちゃったみたい。
わたしの知ってる人だったら、ご挨拶しようと思ったんだけどなぁ……。

と、主人公が残念に思っていると、そこでメルヤが主人公の存在に気づいた。

▲　ボイス加工あり
【かなり遠くで聞こえる】
●正面　30センチ
「【ここから主人公に話しかけている。
主人公の存在に気づいて、驚いた様子で。
メルヤはこのトラックから、さらに感情豊かになっている。

主人公とすっかり親しくなった事により、主人公の前では、素直な気持ちが表現できるようになっているので】

あ……！

ご主人様……⁉」

SE3　メルヤの足音

【最初から最後まで流す】

【だんだん近づいてくる】

そんな主人公のもとへ、メルヤが慌てて駆け寄ってくる。

はぁ。こっちに気づくなり走って来てくれるなんて。

めーちゃんってば、なんて可愛いんだろう……❤

と主人公は思うが、同時に、妙に緊張してしまう。

〈主人公〉

「や、やぁ、めーちゃん……！

元気ぃ？　今、大丈夫う？」

これによって主人公は、普通にしようと努力したものの、何だかおかしな感じになってしまう。

二人が離れていたのは、たった半日ほどの事だ。

それなのに、何だかとても久しぶりのような気がして。

メルヤの顔を見た途端、主人公は妙に照れてしまったのだ。

同時に胸がきゅんとして、いつもに増してメルヤがいとおしくなってしまう……。

●正面　３０センチ

「【少し慌てて、心配そうな様子で。

主人公が急遽ここまで来た理由がわからないので。

『もしかすると、大変な話なのではないか』と少し構えてしまっている。

また、主人公の体調も気になる】

いかがなされましたの？

病院は、もうよいのですか……？」

〈主人公〉

「あ。元気元気ぃ！
と、特に用事がある訳じゃないんだけど。
すっかりよくなって退院していい事になったから。
ミーシャお姉さまに居場所を教えてもらって、会いにきちゃったぁ！」

主人公、堂々と口から出まかせを言いながら、メルヤに近づく。

……我ながら、ずいぶん図太くなったなぁ……。

と思いながら、すぐそばまで歩いて行く。
もっとも、真相が知られればメルヤに叱られる気もする。
だが実際、退院していいと思えるほど元気なのは事実だ。この位の嘘はご容赦頂きたい。
そう思って隣まで行く。
しかし主人公は、この時、つかなくてもいい嘘までついてしまった。
『特に用事がある訳じゃない』なんてありえない。
主人公はとても大事な用があって、可能ならば明日までメルヤの時間をもらいたいから、ここまで来たのである。
なのにこれでは、単なる暇人のようではないか。

●正面　３０センチ
「【あからさまにほっとした様子で。
『主人公には、特に重大な連絡事項等はなさそうだ』と判断したので。
また、言葉の通り、主人公がすっかり元気そうなので】
本当、ですか。
では、退院されたというのは、本当だったのですね。
良かった……！」

〈主人公〉
「めーちゃんは今、一人なの？」

主人公、ドキドキしながら、上ずった声で尋ねる。
するとメルヤも、どこかもじもじとした様子で、でも、大きく頷く。

●正面　３０センチ
「【『あ、確かに、そこから説明しなくてはならなかった』という感じで】
あ。

【少し恥ずかしそうに。
メルヤは今、主人公に会いに行くために時間を空けていたので】
はい。今は一人でございます。
【穏やかに、だがとても嬉しそうに。
主人公の言葉を受けて、自分以外の亜人の少女達の今日のスケジュールを述べていく。
メルヤは、ミーシャが積極的に自分達とコミュニケーションを取り、交流を深めようとしてくれている事がとても嬉しいので】
ミーシャ様が昼食をご用意して下さるそうで。
チハ達は検査後、そちらへ行（ゆ）きましたから。
【話しながら笑みがこぼれる。
亜人の少女達の中でも、特にチハはミーシャと気が合うようで、すっかり意気投合しているので】
そのまま、本日泊まる場所まで案内して下さるそうです。
【少し間をあけてから、もじもじと切り出す。
『本当は自分も一緒に昼食に行く予定だったのだが、主人公に会いたかったので丁重にお断りした。ミーシャもまた、断る理由を察しているようだった』と言おうとしている。
だが、もじもじしてなかなか言えない】
本当は、私（わたくし）もご一緒する予定だったのですが……。

その……」

〈主人公〉
「それなら、よかった！」

主人公、少々大きすぎるくらいの声で、はっきりと伝える。
その姿は、一か月前の主人公とはまるで別人のようだ。
はっきり好意を示そうとするあまり、つい声が大きくなってしまって恥ずかしいが……
同時に、妙に誇らしい。
これまでできなかった事が、できているからだろうか。

●正面　３０センチ
「【※息づかいのみ※　で表現する。
驚きつつも、とても嬉しそうに。
まだはっきりとしたことは言われていない。
それでも、主人公が『わたしはめーちゃんに会いたいと思っていましたよ』とはっきり
意思表示してくれた事は伝わったので】
……！」

〈主人公〉
「わたし、めーちゃんに会いたいと思ってたから。
これからめーちゃんと、一緒に過ごしたいと思ってたから！」

一息に主人公が言うと、メルヤがちょっと泣きそうな顔で大きく頷く。
自分が丸ごと受け入れられている気がして、主人公も泣きたくなる。

●正面　３０センチ
「【驚きつつも、とても嬉しそうに。
ちょっと泣きそうになって。
主人公がはっきりと『会いたかった』『一緒に過ごしたいと思っている』という意思を示してくれたので】
はい」

〈主人公〉
「だから今、時間があるなら嬉しい！」

●正面　３０センチ
「【明るく、とても嬉しそうに。
ちょっと泣きそうになって】
はい……！
【明るく、とても嬉しそうに。
少し早口になって。
主人公の言葉を受けて、自分もはっきりと思いを伝える。
しかし、早く思いを伝えようとするあまり、らしくもなく同じような事を二回言ってしまう】
私（わたくし）も、ご主人様に会いたくて。
少しでも早くお会いしたいと、思っておりましたの……！」

〈主人公〉
「えへへ……。一緒だね。嬉しい……」

●正面　３０センチ
「【明るく、とても嬉しそうに微笑む。
主人公と同じ気持ちである事がわかったので】

ふふ……」

二人、そのまま往来で、一人はふにゃふにゃと、一人はにこにこと微笑み合う。
それはまるでごく一般的なカップルのようで、主人公は嬉しくなる。

●正面　３０センチ
「【明るく、とても嬉しそうに。
主人公と同じ気持ちである事がわかったので】
半日ほどしか離れておりませんのに。
ずっと会いたくて仕方ないなんて、不思議ですね……❤」

〈主人公〉
「うん……❤」

こうして主人公の気持ちは、会話している間にも膨らんでいく。
ただ、一緒に並んで話している。
それだけで嬉しくて、飛び上がりたくなって、胸が締め付けられて。
『メルヤの事が好きだ』という気持ちが、どんどん溢れてきてしまう。

もちろん、メルヤの事はずっと大好きで、憧れで。
愛おしく、そして可愛らしいと思っている。
だけど、約半日ぶりに会ったメルヤは、昨日に増して可愛くて……。

〈主人公〉
「……めーちゃん」

●正面　３０センチ
「【きょとんとしつつも明るく、とても嬉しそうに。
『どうかなさったのですか？』という感じで】
はい？」

気づくと主人公は、ぽろっとこんな事を口にしてしまっていた。

〈主人公〉
「ぎゅってして、いいかな？」

主人公、言い終えるなり、両手を大きく広げる。
そのままメルヤの答えを待たずに、正面から抱きしめた。

ＳＥ４　主人公がメルヤを抱きしめる音
【最初から最後まで流す】

これによって、二人の距離が近づく。

●正面　１５センチ
「【少々驚きつつも、とても嬉しそうに。
主人公が抱きしめてくれたので。
また、いつもより積極的で大胆な主人公にドキドキしている】
あ……」

〈主人公〉
「めーちゃん好き。大好き。すっごい会いたかった……」

ＳＥ５　主人公がメルヤを抱きしめる音２

【最初から最後まで流す】
【次の『メルヤ』のセリフと重ねて流す】

●正面　15センチ
「【うっとりと幸せそうに。
ここは病院の外である。
一応院外ではあり、周囲には人気がないとはいえ、それでも人目がある場所である事には変わりない。
それでも、抱きしめてもらえる事が嬉しい。
恥ずかしがり屋で、これまでとてもこんな事をしなさそうだった主人公が、自分と積極的にいちゃいちゃしたがっている事が嬉しい】
ふふ。ご主人様ったら……❤
苦しいですわよ……❤」

〈主人公〉
「ん……❤」

主人公が正直な想いを告げても、こんな風に、突飛な行動を起こしても。

メルヤはそれを、全部正面から受け止めてくれる。
そう思うと、主人公は

……どうしよう。大好きだ。わたし、めーちゃんの事が大好きだ。

と、改めて己の思いを強く自覚して、胸が一杯になる。
だから我慢ならなくなってしまって、主人公はそのままメルヤにキスをした。

●正面　0センチ
「【※4回※　キスする。
主人公からされる受け身なキス。
あまあまな、唇を軽く重ねるだけのキス】
ん……❤
ちゅ。ちゅ。ちゅっ❤
【うっとりと幸せそうに。
主人公をたしなめているものの、ちっとも怒っておらず、むしろ、もっとしたくなっている感じで】
もう……こんな事までして……❤

ふふ。どこに人目があるか、わかりませんのよ……？」

〈主人公〉
「いいの……❤　会いたかったから……❤」

主人公、答えになっていない返事をして、またさらにキスをする。
もう止まらないと思った。
メルヤの事が好きで、可愛くてたまらないのだ。

●正面　0センチ
「【※1回※　キスする。
主人公からされる受け身なキス。
あまあまな、唇を軽く重ねるだけのキス】
ん❤
【甘いため息をついて、うっとりと幸せそうに。
やはり主人公をたしなめているものの、ちっとも怒っておらず、むしろ、もっとしたくなっている】
こんなの、いけませんわ……❤

【※しばらく※　キスする。
今度はメルヤからも求める、積極的であまあまなキス。
『こんなのいけませんわ』と言いながらも、すっかり自分から求めているキス】
んぅ❤　ん❤　ちゅ❤
ちゅぱあっ……ちゅっ❤
くちゅっ❤
【※3回※　呼吸する。
ゆっくりとした、浅めの呼吸。
うっとりとした、興奮気味の、甘い呼吸】
はぁ、はぁ、はー……。
【少し甘えた、媚びた声で。
外にいるのに、メルヤもすっかりいちゃいちゃモードに入りかけている感じで】
全く。ご主人様がこんなに悪い方だなんて。
私（わたくし）、存じ上げませんでした……❤
【※息づかいのみ※　で表現する。
うっとりとため息をつく。
『主人公の事が、好きで好きでたまらない』という感じで】
はぁっ……❤

【うっとりと幸せそうに。
自分の想いを伝えて、またそのままキスに移行していく】
大好きです。
大好きです、ご主人様……❤
【※3回※　キスする。
軽く唇を合わせるだけだが、お互いに求め合う甘々なキス】
ちゅ。ちゅっ。ちゅ……❤
【※息づかいのみ※　で表現する。
うっとりとため息をつく。
『主人公の事が、好きで好きでたまらない』という感じで】
はぁっ……❤」

〈主人公〉
「めーちゃん……あの……❤」

メルヤ、会話をするために少し離れる。

●正面　15センチ

「【うっとりと幸せそうに続きを促す】
ん？」

〈主人公〉
「そしたらわたし。このまま、お誘いしてもいいのかな……？
わたし、めーちゃんと行きたい所があるんだ。
二人っきりに……なれるところ……なんだけど……」

もじもじと主人公が告げると、メルヤがくすくすと笑った。
『たった今まであんなに積極的だったくせに、今更、どうしたのだ』と言われている気分である。
それは少々恥ずかしいけれど……やはり、とても幸福な瞬間だった。

●正面　15センチ
「【うっとりと幸せそうに頷く。
そして、今日明日の予定を述べる】
ええ。私（わたくし）の予定はここまでございます。
明日の二時に、人と約束があるのですが。

【特にうっとりと、嬉しそうに。
『あなたのために、時間を空けておきましたよ』と伝える感じで】
それまでは、何も、ございません……❤」

〈主人公〉
「……❤」

驚きと嬉しさでつい無言になる主人公に、今度はメルヤが照れた様子で言う。
どうやら二人は同じ気持ちだったらしい。
少々無理をしてでも、お互いと過ごしたかったのだ。

●正面　15センチ
「【少し恥ずかしそうに、でも嬉しそうに。
チハ達にはすでに『今日は戻らず、主人公と一緒かもしれない』という事を伝えている』と打ち明ける】
それに……実は……その。
『これから、ご主人様に会いに行く。もし、遅くなるようなら、そのままご主人様と一緒に過ごす』と。

チハには、すでに伝えておりますから……。
ですから……大丈夫です」

メルヤ、近づいて、主人公の左耳にささやく。
これによって声の方向が『正面』から『左』になる。

★左　ささやき　０センチ　※マークのセリフまでささやく
「【少し恥ずかしそうに、でもとても嬉しそうに。
これは実質的に『今晩はずっと二人きりでいましょう』という意味なので。
内心、ものすごく勇気を出している。
主人公ともっと深い関係になるために、メルヤは今、最大限勇気を出している】
今すぐ……二人になれる所へ……行きましょう……？」※

〈主人公〉
「……！」

一度フェードアウトする。

数十分後。
主人公とメルヤ、ミーシャが用意してくれた小さな家で、二人でいる。
久しぶりにここへ来た主人公が、物の置き場所や食材の有無などを確認している間、メルヤは機械人形でチハと通信している。
家の中には食材もあれば、機械人形が待機しており、主人公はミーシャの心遣いに感謝する。

このトラックにはチハのセリフがあるが、演出上ボイスはない。

【※ボイスなし※】
〈チハ〉
「おっ。じゃあ大将と無事に合流できたんだな？
よかったじゃん、メル姉！
そしたら、今日はこのまま、大将んちの別宅？　みてぇなとこで世話になるんだな？」

▲　ボイス加工あり
【かなり遠くで聞こえる】
●正面　３０センチ

「【チハと話している。
少し申し訳なさそうに。
亜人の少女達の体調は未だ万全ではないのに、リーダーである自分が一日離れて過ごす事になってしまったので。
しかし、この件について反対している亜人の少女は、一人もいない。
皆メルヤの想いを知っているからだ。
全員が主人公とメルヤの恋を応援しているし、そもそも、亜人の少女達のために一人犠牲になろうとしていたメルヤの行動について文句を言う人間など一人もいない。
全員が『無事に主人公達の街に保護され、イザベラがらみの人間も皆捕縛された以上は、自分達の事は気にしなくていい。できるだけ、メルヤの自由に生きて欲しい』と思っているので】
ええ……そういう、事だから。
ごめんね……チハ」

【※ボイスなし※】
〈チハ〉
「あー、いいっていいって、気にすんな♪
元々聞いてたし。

こっちも、検査に引っかかったやつはいなかったし。
ミー姉（ねえ）にすげえうまいもん食わせてもらって、みんなご機嫌だから。
こっちは気にせず、大将と楽しんで来いよ！」

▲　ボイス加工あり
【かなり遠くで聞こえる】
●正面　３０センチ
「【チハと話している。
とても嬉しく、感激した様子で。
チハ達が全面的にメルヤをサポートし、自由にさせてくれている事がとても嬉しいので。
また、チハがミーシャの事を、すでに『ミー姉』と呼ぶほどの関係になっている事を知って、笑顔になってしまう】
ありがとう……！
ふふ。じゃあ……明日（あす）の昼には合流しましょう」

【※ボイスなし※】
〈チハ〉
「おう。署名がらみの事はこっちで進めとくから。

看護師のねーちゃん達と打ち合わせする時までには戻ってきてくれよな」

▲　ボイス加工あり
【かなり遠くで聞こえる】
●正面　３０センチ
「【チハと話している。
とても嬉しく、また、チハの存在を心強く感じている。
『チハがいてくれてよかった』と改めて感じているので】
ええ、よろしくね。
本当にありがとう……！」

〈主人公〉
「？」

ＳＥ５　主人公の足音
【最初から最後まで流す】
【次の『メルヤ』のセリフと重ねて流す】
【だんだんメルヤの声が近くなる】

主人公、建物全体の確認を終えて戻ってきたところ、メルヤが通信しているのに気づいて、そーっと近づいて行く。
主人公はここから部屋に入ってきたので、二人の会話の内容はほとんど聞いていない。

【※ボイスなし※】
〈チハ〉
「んじゃ。大将によろしく。また明日な！」

▲　ボイス加工あり
【少し遠くで聞こえる】
●正面　３０センチ
「【チハと話している。
明るく穏やかに】
じゃあ、また明日」

ＳＥ６　機械人形の通信が切れる音
【最初から最後まで流す】

〈主人公〉
「……❤」

主人公、通信が終わったのを確認するなり、メルヤを抱きしめる。
さすがに通信の邪魔をする気はなかった。
だが、それが無事終わったのであれば、後は自分がメルヤを独占してもいいだろうと思ったのだ。

SE7　主人公がメルヤを抱きしめる音3
【最初から最後まで流す】

主人公がメルヤを抱きしめた事で、二人の距離が近づく。

●正面　15センチ
「【ここから、主人公に話しかけている。
うっとりと幸せそうに。
通信が終わるなり、主人公が背後から抱きしめてきたので。

特に驚いたそぶりはなく『抱きしめられる事はわかっていた』という感じで】
あ……❤
ご主人様……❤」

〈主人公〉
「チハちゃんとお話ししてたの？」

メルヤ、主人公の問いに、笑顔で頷く。

●正面　15センチ
「【穏やかに、嬉しそうに。
だが、少し恥ずかしそうに。
通信中のチハの言葉がどれもとても嬉しく、また、自分を深く理解してくれてのものだったので。
そして、主人公との関係もすっかり察されているのが、何だか恥ずかしいので】
はい。チハと通信しておりました。
ふふ。皆（みな）には私（わたくし）の考えなど、お見通しだったようで……。
【普段のメルヤの口調のままで言う。

『こっちは気にせず、大将と楽しんで来いよ！』はチハのセリフだが、この部分に関しては、演出上チハのボイスはないので】

『こっちは気にせず楽しんで来い』と言われてしまいました……」

〈主人公〉

「本当にいい子達だよね……」

●正面　15センチ

「【穏やかに、とても嬉しそうに。

主人公の言葉を肯定する。

メルヤ自身、この一か月ほどで、仲間達の素晴らしさや絆を改めて実感したので】

はい。私（わたくし）は、本当に良い仲間を持ちました。

【穏やかに答えつつ、どこか含みのある感じで。

聞き手からすると『一体何を頑張るんだろう……？』と思わせる感じで】

彼女達の為にも、頑張らなくては……と思います。

【一呼吸おいてから。

ここで、それとなく話題を変える。

穏やかに、嬉しそうに。

主人公のゆかりの場所に招いてもらえた事がとても嬉しく、また、これによって主人公の事をもっと知れそうな気がするので】

それにしても……素敵な所ですわね。

【穏やかに、落ち着いたトーンで。

だが、ここから『かねてから話さなくてはならない』と思っていた話題をふる。

それは『主人公が今後、騎士をやめる』『そうなった経緯には、メルヤが深く関わっている』という件についてである】

ご主人様は、このお家を利用して、ご家族と鍛錬をされたり。

狩りに出たりしておられましたのね……。

【一呼吸おいて。

真面目な、落ち着いたトーンで。

まるで『主人公は将来騎士になる事を夢見て、幼い頃からここで修行をしてきた。なのに、メルヤのせいで、その夢は終わってしまった』と言っているかのように。

※ここから真面目な話に移行しつつも『真面目で重たすぎて、ここまでとあまりにギャップがある』という印象にならないようにお願いします※】

〈主人公〉

将来……騎士になるために」

「めーちゃん。その話はもういいんだよ？」

主人公、急に雲行きが怪しくなってきた事に気づき、メルヤをそっとたしなめる。
主人公が騎士をやめる事。
それは主人公自身とっくに納得しており、また、妥当だと思っている事だ。
なのにメルヤは、まだこの事を気にしているらしい。

●正面　１５センチ
「【穏やかに優しく、だがきっぱりと。
『この話は、今しておくべきなのだ』『だから、続けさせてほしい』という感じで】
いいえ。
私（わたくし）はこの事について、ずっと考えておりました。
【真面目で落ち着いたトーンで。
落ち着いて、ゆっくりと。一言一言に重みがある感じで。
主人公が任務に背いてまでメルヤを救い、その結果騎士をやめる事になりそうな件について、自分なりの想いを述べていく】
ご主人様。
事（こと）の経緯（けいい）はどうあれ、私（わたくし）は、騎士として生きるはずだ

った貴方様の運命を狂わせてしまいました。
それを事実として正しく受け止め。
貴方様に救われたこの心と身体で、このご恩をどのようにしてお返ししていけばよいか。
助けて頂いたあの日から、ずっと考えておりましたの。
【数日前の出来事を振り返る。
主人公に施した、治療について語る】
その答えの一つが、この身を以（もっ）て貴方様を治療し、その後も従者としてお仕えする。という事でした。
【声のトーンが下がる。
これまでメルヤは、無我夢中で主人公を支えよう、役に立とうとして行動してきた。
しかし、ふと振り返ってみるとそれは『主人公の役に立ちたい』というだけではなかった。『主人公の人生を狂わせた事に対する、贖罪をしたい』『治療をしつつ、セックスもして深い関係になりたい』『その過程で、自分個人の事をもっと知ってほしい』『あわよくば、人間としてでよいから、自分の事を好きになってほしい』という、メルヤ個人の一方的なエゴも多く混じっていたような気がする。
それは、本当に主人公のための行動なのだろうか？　と思うと、決してそうとも言えない気がしてきたので】
ですが、少々迷いもございました。

これらの行動は、全て私（わたくし）が勝手な判断でしているだけのもの。
たとえ私（わたくし）が『お側に居たい』と願っても。
ご主人様にとっては、重荷なだけなのではないか。
ご迷惑なのではないか。と。
次第に考えるようにもなりました」

〈主人公〉
「……」

主人公、ここまで聞いて小さく息をのみ、覚悟を決める。
今こそ自分の気持ちを、改めて伝える時だ。

……たとえ、めーちゃんが今後の事をどう考えていたとしても。
わたしは、今のわたしの気持ちを伝えたい。
『相手の反応を見て決める』じゃなくて、今の本心を話したい……！

そう思ったのだ。

●正面　15センチ
「【だが、『それでも私は、ご主人様のお側に居たいです。それは、貴方様の事を、一人の女性としてお慕いしているからです』と言おうとして途切れる。
主人公が話し始めたので】
ですが、私（わたくし）は……」

〈主人公〉
「……めーちゃん。その事なんだけどね。
わたしからも、お伝えしたい事があって」

●正面　15センチ
「【虚を突かれた感じで。
主人公がこれから何を言おうとしているのか、見当もつかないので。
また、主人公があえてメルヤの言葉を遮った事を理解したので。
つまり、主人公は今、メルヤの言葉を遮ってでも、伝えたい事があるらしいと考えたので】
え？」

主人公、言うと、今日、メルヤに渡すために、あらかじめ用意してきた小さな包みを見せる。
これは、メルヤに会いに行く前、買いに行ってきたものだ。
これのために、主人公はあんなに早く出発していたのだ。

SE8　主人公が包みを差し出す音
【最初から最後まで流す】

●正面　15センチ
「【小さく、だが内心非常に驚いて。
包みの大きさ、形状、このタイミングで差し出した事からして『自分のプレゼントではないか』と期待してしまうので】
……あ……！
【声が震える。
それから、恐る恐る尋ねる。
『いや、ご主人様はまだ何も言っていないのに早計だ。これは、自分あてのものではないかもしれないのに』と思いつつも、どうしても期待してしまうので】
ええっと……。

この包みを、私（わたくし）に……？」

〈主人公〉
「うん。めーちゃんにプレゼントだよ。
開けてみて……ほしい」

主人公、メルヤの言葉に深く頷き、それとともに、明確にこれがメルヤ宛のプレゼントである事を告げる。
そして、思う。

……確かにわたしは、本当に図太くなったみたいだ。
ちょっと前なら緊張してしまって。
『こんなわたしからのプレゼントなんか、喜んでもらえるのかなぁ』なんて不安になって。
とても、こんな風には返答できなかった。
それが、どの位良い事なのかはわからない。
でも……こんな風に自分を変える事ができたのは、めーちゃんがいてくれたからだ。
だから、めーちゃんの前では、素直でいたい。

そう思った。

●正面　１５センチ

「【声が震える。
それから、恐る恐る開封する旨を伝える。
どうしても期待してしまうが、中に何が入っているかまではわからないので。
もしかすると、自分に取って嬉しいものではない可能性もあるので】
はい。では。
開封します……」

ＳＥ８　主人公が包みを差し出す音
【最初から最後まで流す】

●正面　１５センチ

「【※息づかいのみ※　で表現する。
驚きで息をのむ。
信じられない事に、プレゼントされたのは、指輪だったので】

……！

【『これは指輪でお間違いありませんか。このようなものを、本当に私に贈るとおっしゃるのですか』と言おうとするものの、言えない。

あまりにも驚き、感激しているので。

その一方で『とても嬉しいが、受け取れない。自分は受け取るにふさわしい存在ではない気がする』と不安になってしまうので】

これは……！」

〈主人公〉

「うん。……指輪。受け取って、ほしい」

主人公、メルヤの手の中の物に対して、単純に『指輪だ』とだけ告げて、頷く。

少し前の主人公であれば、自信がないあまり、つい『ささやかだけど』とか『あまり高価な物じゃないけど』なんて言葉を付け加えてしまっていただろう。

だが、もう謙遜するのはやめようと思った。

確かにこれは、この短い時間で、慌てて用意したプレゼントだ。

また、ものすごく高価なものだとも言えない。

それでも、主人公はこれを良いものだと思って選んだ。

今の主人公にとっては、最も考えて選んで送った、一番良いプレゼントだからだ。

●正面　１５センチ

「【驚きと感激が入り混じって、困惑する。
やはり『とても嬉しいが、受け取れない。自分は受け取るにふさわしい存在ではない気がする』と不安になっているので】
そ、そんな。いけません。
このような素晴らしいものを、私（わたくし）などに……。
【『だって私は、貴方様の従者です』と言おうとして、途切れる。
主人公が、またも意図的にメルヤの言葉を遮り、自分の気持ちを伝えてきたので】
だって私（わたくし）は、貴方様の」

〈主人公〉
「恋人だよ。わたしはめーちゃんの事、恋人だと思ってる」

●正面　１５センチ

「【※息づかいのみ※　で表現する。
驚きと感動で息をのむ。

主人公が自分の事を、明確に『恋人だ』と言ったので】
……！」

主人公の言葉を受けて、メルヤの瞳が揺れる。
そうだ。今こそはっきりさせる時だ。
主人公は意を決して、とうとう自分の想いを告げた。

〈主人公〉
「もし、めーちゃんがそう思っていなかったのなら。改めて言います。
わたしはあなたが大好きです。
わたしの恋人になって下さい……！」

●正面　15センチ
「【思わず泣きそうになって。
ここからゆっくりと、何度も質問を繰り返す。
ここから思わず、何度も確認してしまう。
主人公の言葉は、自分にはもったいない言葉のように感じられたので。
家柄のしっかりした女性である主人公が、自分のような女性を選んでいいのか、不安に

なってしまったので】
……良いのですか？
私（わたくし）は、この指輪を受け取って」

〈主人公〉
「……うん。めーちゃんのために選んで、買いました。
それは、めーちゃんのためだけのものだよ」

●正面　15センチ
「【思わず泣きそうになって。
ゆっくりと、何度も質問し、確認する。
さらに、何度も確認してしまう。
主人公の言葉は、自分にはもったいない言葉のように感じられたので。
家柄のしっかりした女性である主人公が、自分のような女性を選んでいいのか、不安になってしまったので】
ご主人様は、私（わたくし）で良いのですか？
私（わたくし）を従者、ではなくて。
貴方様の恋人に、していただけるのですか……？」

〈主人公〉
「もちろんだよ。
……ていうかわたし、めーちゃんの事従者だと思ってた事なんてないから！
あの屋敷で出会った頃から、めーちゃんはずっとわたしの憧れで、尊敬する、大好きな人だよ。
『恋人にしていただける』なんて言うなら、そうしてほしいのはわたしの方！
ずっとわたしは、めーちゃんの事が好きだったんだから……！」

●正面　15センチ
「【感激のあまり泣きそうになって。
だんだん、『ゆっくり』から『少しだけ早口』になる。
それは喜びのあまり早口になっているのもあるし、これから言う事は、少しでも早く主人公に伝えたい事でもあったので】
ご主人様……！
はい。私も、貴方様の事が大好きです。
貴方様以外なんて、考えられません。
私（わたくし）には、貴方様だけです……！」

〈主人公〉
「そうだよ。だからもう、自分の事を悪く言うなんてやめてね？
わたしにとっては、めーちゃんがこの世で一番魅力的な女性なんだから……！」

早口で言いきると、メルヤが泣きそうな顔になる。
それを見たら、主人公も泣きそうになった。

●正面　15センチ
「【泣きそうになりながら、嬉しそうに。
ゆっくりと。
喜びをかみしめる。
それから、主人公の言葉を受けて、今後考えを改める事を伝えていく】
はい。
もう二度と自分を卑下など致しません。
貴方様の恋人としてふさわしい女性になる。
これからの人生は、その為に尽くします」

二人、お互いに自然と顔を近づけて、キスする。
これによって、距離が近づく。

●正面　0センチ
「【※3回※　キスする。
ゆっくりとした、甘々なキス】
ちゅ。
ちゅっ……❤　ちゅ❤
【ここで、ある事に気づき、小さく笑う。
『もし恋人になるのなら『ご主人様』という呼び方は適切ではない気がする』と思ったので】
ああ……ふふ。
でしたら『ご主人様』という呼び方も、いずれ改めねばなりませんね……❤
【しかし、このままで良いような気もしてくる。
メルヤは、主人公を目上の存在だと思っているのもあったが、それ以上に、慕う気持ちを呼び方に込めた結果『ご主人様』と呼び始めたので】
でも……私にとっては、貴方様はずっと『ご主人様』なのかもしれません。
心からお仕えしたいと思う程尊敬して。

お慕いしているのは、生涯貴方様だけですから……❤」

〈主人公〉
「めーちゃん……！」

●正面　0センチ
「【うっとりと幸せそうに。
少し泣きそうになって、噛みしめるように。
メルヤは今までの関係でも十分満足しており、幸せを感じていた。
だが、これからはもっと幸せになってもいいのだ、主人公をもっと幸せにできるのだと思うと、なんだか泣きそうになってしまったので】
指輪。ありがとうございます。
生涯大切に致します。
とても……とても嬉しいです……」

〈主人公〉
「めーちゃん。好きだよ。大好き。
絶対幸せにするから……！」

●正面　0センチ
「【※1回※　キスする。
ゆっくりとした、甘々なキス】
ちゅ❤
【泣きそうな声で、幸せそうに。
プレゼントされた指輪を、うっとり眺めながら】
ふふ❤　こんなに愛して頂けるなんて。
私（わたくし）は、この世で一番の幸せ者ですわね……❤
【※しばらく※　キスする。
ゆっくりとした、甘々なキスから、次第に濃厚なキスに移行していく。
純愛ラブラブキスをしていたら、段々夢中になって、いつの間にかえっちな雰囲気になっていくイメージ】
ちゅ❤　ちゅ。
ちゅっ……ちゅくっ……ちゅ❤
あぁんむ……れろっ、ちゅ❤
くちゅる……ちゅぱっ❤」

〈主人公〉
「ところでその……めーちゃん……。
そ、そんな風にキスされると……❤」

●正面　0センチ
「【思わず笑ってしまう。
主人公の考えている事は、手に取るようにわかるので。
おそらく自分と同じ事を考えているのだろうと思っているので】
ふふ……ふふふふふっ❤
ええ……貴方様のお気持ちは、手に取るようにわかる気がします」

メルヤ、近づいて、主人公の左耳にささやく。
これによって声の方向が『正面』から『左』になる。

★左　ささやき　0センチ　※マークのセリフまでささやく
「【嬉しそうに、ひそひそと。
あまあまにささやく。
これまでよりもさらに距離の近くなった、そっとセックスに誘う、恋人らしいささやき】

私も今。きっと同じ気持ちですから……❤」※

〈主人公〉
「あはは……わかっちゃう？
なんか恥ずかしいなぁ……」

照れ笑いする主人公に、メルヤが微笑む。
これによって声の方向が『左』から『正面』になる。

●正面　0センチ
「【うっとりと嬉しそうに、自分自身の性欲について語る。
これまでメルヤは、己にはあまり性欲がないと思っていた。
それは、ハーフの淫魔と言うのもあるし、性格的にもそうであると考えていたので。
だが、主人公と出会ってから、それが変わってきたのが嬉しく、気恥ずかしくも幸せなので】
ふふ……私（わたくし）はずっと、己を血の薄い淫魔で。
欲求は普通の人間の女性と変わらないと思っておりました。
【少し恥ずかしそうに。でも、嬉しそうに。

【主人公にぴったり密着しながら、こっそりと告白するイメージで】
……ですが。
貴方様を知ってから、欲望が止められそうにありません……❤」

〈主人公〉
「普通の人間の女性も、この通り、結構えっちなものだよ。
だから……大丈夫……❤」

メルヤ、正面の位置のまま、ささｙく。

★正面　ささやき　０センチ　※マークのセリフまでささやく
「【うっとりと幸せそうに。だけどどこか淫靡に。
『沢山一つになる』つまり『沢山セックスをしよう』と、甘々に誘う】
お慕いしております……ご主人様……❤
今宵も沢山……。一つになりましょう……❤」

ここでフェードアウトして終了。